



幸地学の世界

☆2

ところが首やら頭やら、扇子頭のサンシン弾き、弓のようにしなったサンシンの竿(まね)も、どれも独創的だ。ピンピン響く明るいリズム、エイサーのチョンダラーがこちらに歩いてくるようだ。面白い。つい

自由奔放でクセある動き

代表 上原誠 (画廊沖縄)

ついで、画面の奥へ誘われてしまう。自由奔放な形

クにかかっている。この道化ぶりは幸地のエンターテインメントの魅力だ。那覇市と儀に生まれた幸地は少年時代によく近くの劇場でウチナー芝居を見たという。パリで制作し始めた初期のころの作品には、そのなごりこ

サンシン3

(1996年)

思われるものがいくつかある。「尚巴志の夢」、

沖縄タイムス創刊五十周年特別企画「幸地学展」は、二十五日まで、那覇市民ギャラリー(パレットくもじ六階)で開かれています。

☆2

「幻想の中のアマミキヨ」、「イナグ(女)をひそめていた。意地みしろ」「ニティラ、米國グラミー賞の仕事ブイ」、"モーアシビにみる彼自身の解放"など七点の大作(キャンバス)である。九〇年にはややの沖縄ものを手掛けて興味を変えて、「マンガロる」「サンシン3」は「ブ」、"珊瑚礁"「桜」の中の一枚である。

の沖縄シリーズ石版画を発表している。以降、沖縄を題材にした作品は影をひそめていた。